CLF

同志社大学
学習支援・教育開発センター レポート

REPORT

Center for Learning support and Faculty development report

Vol. 35
2024.3

CONTENTS

ページ
02 開催報告
FD研修会
新任教員研修会
TA研修会
教育方法・教材開発費制度について
教育開発調査活動費について
04 学部・研究科・センター等FD活動報告
（社会学部、理工学部、免許資格課程センター）
2023年度部会活動報告
大学入学準備講座
06 2023年度学生調査報告
08 ラーニング・コモンズ運営状況
13 元ラーニング・アシスタントから見た
同志社大学良心館ラーニング・コモンズの
過去・現在、そして未来
16 Column「新学年暦事始め」

学習支援・教育開発センター設置の趣旨

本センターは、本学における全学的な学習支援施策の企画及び実施、
全学的な教育施策の企画及び開発、
教育活動の継続的な改善の推進及び支援により、
大学教育の充実と発展に寄与することを目的として設置されています。

■開催報告

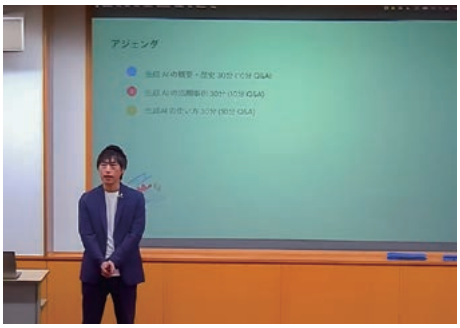
FD研修会

2023年度は本学教職員を対象としたFD研修会を以下のとおり実施しました。なお、開催した全てのFD研修会の様子は録画し、後日学内向けにオンデマンド配信しました。

生成AIと共に革新の未来へ

様々な分野で注目を浴びている生成AIについて、岡田幸紀氏を講師にお招きし、研修会を行いました。生成AIに関する基礎的な知識や、活用事例についての解説に加え、デモ操作によるレクチャーもしていただきました。当日は対面のみの実施でしたが、教員・職員合わせて約60名の参加があり、質疑応答も多く、生成AIへの関心の高さがうかがえました。

日時　2023年9月12日(火)13:00〜14:30
講師　岡田幸紀 氏(グーグル・クラウド・ジャパン合同会社)
開催場所　対面:(今出川)良心館107教室 (京田辺)情報メディア館401教室
※テレビ会議システムを利用し、今出川の映像を京田辺に同時配信
※後日オンデマンド配信



[共催]情報化推進部

画面越しの相手に伝える技術

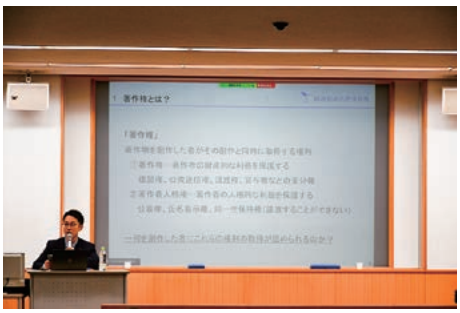
2024年度より導入される新たな学年暦における授業準備に向け、桝太一先生(ハリス理化学研究所)より、聞き手の表情が見えない状況で話す際のテクニックやポイントについて、アナウンサーの経験をもとにお話しいただきました。教室での授業とは異なる難しさを感じられている先生も多く、当日は対面、オンライン合わせて100名を超える参加がありました。オンデマンド配信の視聴率も高く、授業準備に役立つ有意義な研修となりました。

日時　2023年10月25日(水)13:10〜14:10
講師　桝太一 先生(ハリス理化学研究所助教)
開催場所　対面:(京田辺)夢告館201教室
オンライン:Zoomによるリアルタイム配信
※後日オンデマンド配信

オンライン授業における著作権の取扱い

新たな学年暦での2回分のオンデマンド授業の準備に向け、御池総合法律事務所で弁護士をされている先生を講師にお招きし、オンライン授業における著作権の取り扱いについて研修会を行いました。著作権に関する基本的な知識に加え、授業資料や試験問題の作成などの具体的な場面における著作権の取り扱いや、注意すべきことを詳しくご説明いただきました。著作権に関する理解が深まり、授業準備に役立つ研修となりました。

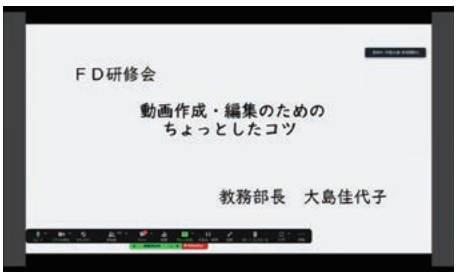
日時　2023年12月22日(金)14:55〜16:25
講師　若竹宏諭 氏(御池総合法律事務所)
開催場所　対面:(今出川)良心館107教室
オンライン:Zoomによるリアルタイム配信
※後日オンデマンド配信



新学年暦における2回分のオンデマンド授業作成・公開手順について

新たな学年暦における授業準備に向け、2回分のオンデマンド授業に焦点をあて、Panoptoの基本的な操作方法やシラバスへ動画のURLを入力する方法、e-classで録画・公開する方法などを、実際に画面を操作しながらご説明いただきました。ご自身でPCを操作しながら、研修を受講されている先生も多くいらっしゃり、有意義な研修となりました。

日時　2024年1月16日(火)16:40〜18:10
講師　大島佳代子 先生(教務部長)
開催場所　対面:(今出川)良心館103教室
オンライン:Zoomによるリアルタイム配信
※後日オンデマンド配信



新任教員研修会

本学教員として教育・研究活動に従事していただくうえで、ご理解いただきたい事項の認識を深めていただくことを目的として、毎年度新任教員研修会を実施しています。

2023年度は、新任教員約40名の参加がありました。また、後日オンデマンド配信も行いました。

日時　2023年4月2日(日) 13:00〜16:30
開催場所　良心館103教室

内容

①ガヴァナンス、意思決定の仕組み
②キリスト教主義と建学の精神
③教育活動
④グローバル化の取組み
⑤学生支援体制
⑥研究活動
⑦入学試験業務
⑧教育・研究倫理について

各所管の機構長、所長等から各内容について説明いただきました。

受講者の声（終了後アンケート結果より一部抜粋）

本学の建学の精神をより深く理解できた。

本学における研究推進・支援体制について大変勉強になり、今後の研究活動の参考になった。

同志社のキリスト教主義に基づく教育・研究活動、国際性等について理解できた。

グローバル化への取り組みについてよく理解できた。

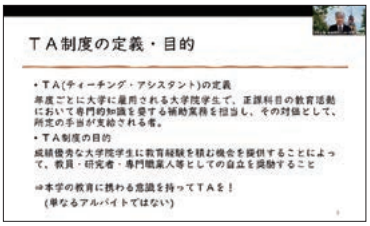
TA研修会

ティーチング・アシスタント（TA）に任用される大学院生（予定者を含む）を対象として、TA制度の定義・目的、TAの業務内容、心得、キャンパス・ハラスメントの防止、TAの事務手続き等について説明する研修会を2011年度より実施しています。

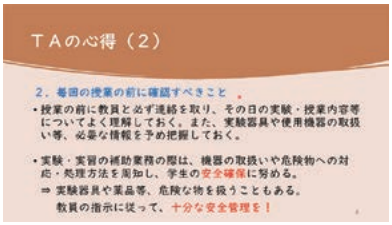
2023年度は昨年度に引き続きオンデマンド配信にて実施しました。

研修会動画・資料は下記サイトで公開しています。

TA研修会　https://clf.doshisha.ac.jp/clf/ta/ta.html



TA研修会の様子（文系研究科向け）



TA研修会の様子（理系研究科向け）

■教育方法・教材開発費制度について

本学における授業改善をさらに促進するために、専任教員を対象として、新たな教育方法および教材開発に必要な費用全般を補助する「教育方法・教材開発費制度」を設置し、毎年度秋学期に次年度の開発費の申請を受け付けています。制度の利用を希望される方は、以下詳細をご覧いただき、受付期間に申請をお願いします。

制度の利用を希望される方は、右記詳細をご覧いただき受付期間に申請をお願いします。

教育方法・教材開発費制度　https://clf.doshisha.ac.jp/clf/support/development/materials.html

本制度を利用して開発された教材の一部は、本学オープンコースウェア上で公開しています。

同志社大学オープンコースウェア　https://clf.doshisha.ac.jp/clf/opencourse/opencourse.html

■教育開発調査活動費制度について

本学の教育の質的向上のための積極的な調査活動を支援するために、専任教職員を対象として、教育開発に関する各種学外企画の参加に必要な旅費・参加費等の費用補助を行う制度を設けています。補助対象となる催しはメーリングリスト及び、以下のページで紹介しています。

メーリングリストへの登録を希望される場合は学習支援・教育開発センター事務室までご連絡ください。

研究会・研修会のご案内　https://clf.doshisha.ac.jp/clf/research/research.html

本制度の詳細を掲載しています。

教育開発調査活動費制度　https://clf.doshisha.ac.jp/clf/support/action.html

■学部・研究科・センター等FD活動報告

それぞれ取り組んでいるFD活動の一部を紹介します。

社会学部

社会学部では、教育施策の企画及び開発、並びに授業内容及び方法をはじめとする教育活動の継続的な改善を目的として、各主任を中心にFD委員会が組織されている。２０２３年度の取組の一端を紹介しておくと、FD研修を２回実施し教育改善に取り組んだ。ポスト・コロナ時代を迎え大学の授業は大きく変容し、特に教育のデジタル化は顕著であった。その中でも「生成AI」の登場は、教員・学生に大きな影響を与え、それに関する知識共有が喫緊の課題となり、「生成AIの特性と社会科学研究・教育での実践事例」<生成AIの特性とプロンプトの基礎>を開催した。また、全学の教育改善に向けた取組みに対応するため、カリキュラムマップの作成に関する動画を共有し、意見交換を行った。いずれの研修においても学部の全教員が参加し、議論の有用な情報提供の機会となったことがうかがえた。今後も全ての教員がFD活動に関心を持ち、学部、大学院共に、実りあるFD活動を組織的に推進し、実施していく。

理工学部

2023年度は、理工学部FDと理工学研究科FDを1回ずつ実施した。学部FDでは、株式会社ナガセ東進ハイスクールビジネススクール本部から講師を招き、『入学前教育から見える理工学部生の特徴～東進のリアルデータから見えてくるもの～』と題して、入学前教育の提出課題の結果（データ）の読み解き方、他大学の学生像との比較をもとに、意見交換・質疑応答が行われた。研究科FDでは、京都府警外事課から講師を招き、『外国への技術流出のリスク』について、正課・正課外にかかわらず、授業や研究室運営、勉強会、セミナー等を運営する際の注意点などを共有した。外為法改正により輸出者等遵守基準が施行されたことに伴い、特に研究科では、外国人留学生・外国人研究者・特定類型の該当者を受入れた環境で教育研究を行っているため（「教授行為」）、授業・会議・打合せ、研究指導、技能訓練電話や電子メールでの情報のやり取りといったことが「技術情報」の提供にあたるケースについての啓発があった。

免許資格課程センター

免許資格課程センターでは、2023年度のFD研修会を２回実施した。2023年7月19日（水）は、『電子黒板の使い方』と題して、本多千明（免許資格課程センター）と森口洋一（免許資格課程センター）より、話題提供を行った。2023年度の秋学期から、大学の教室に電子黒板が設置されることに伴い、その活用方法に関する検討を行った。2023年11月15日（水）は、外部講師として京都市内の私立小学校の教諭と私立中学校の教諭を招聘し、『デジタル時代のハイブリッド授業～電子黒板・ICT機器の活用紹介』と題した研修会を実施した。参加者はiPadを実際に操作して、ロイロノートや、ICT機器を活用した教育方法の一端を知ることができた。Society 5.0時代の到来により、教育におけるICTを基盤とした先端技術等の効果的な活用が求められている。ICT機器を活用した教育方法について、今後とも検証を重ねたい。

■2023年度部会活動報告

FD支援部会

●設置の趣旨

教育内容、授業方法の改善を推進するとともに、教育効果に関わる全学的な企画の検討を行うことを目的として設置しています。

●活動報告

今年度の本部会は、前年度に引き続き、新規の取組みや大きな見直しが必要となる事項について、深い議論を行う場として開催しました。
まず、昨今の高等教育の動向について、改めて、中央教育審議会の「2040年に向けた高等教育のグランドデザイン（答申）」や「教学マネジメント指針」により理解を深め、第4期の機関別認証評価も視野に入れた、本学の取り組むべき課題について、部会委員の間で共通認識を持ちました。

「学生による授業評価アンケート（以下、授業評価アンケート）」について、前年度に引き続き、議論を行いました。前年度の本部会において、授業評価アンケートの調査項目の変更を審議しましたが、回答者個人が特定される可能性がある点、回答率を上げる方法、結果の組織的な活用、大学院科目での実施といった課題については、具体的な対応方針が決まっていないため、更に議論を深めました。回答者個人が特定される可能性がある点と、大学院科目での実施については、本部会としての方向性を定めましたが、回答率を上げる方法と結果の組織的な活用については、引き続き議論を進めています。また、2024年度より、新たな学年暦が導入されることをふまえ、実施要領や調査項目の見直しを行いました。

カリキュラムツリーの要件について、議論を行いました。カリキュラムマップの共通フォーマットや作成方法については、前年度の本部会において整備しましたが、カリキュラムツリーに関しては継続課題となっており、全学的な要件を整備する必要がありました。議論の上、本学としてのカリキュラムツリーの必要要件を定め、具体的な作成手順も決定しました。カリキュラムマップに引き続き、カリキュラムツリーについても全学的な整備を進めていきます。

学びの実態調査について、調査項目の見直しを行いました。本調査の設問は、毎年度調査する項目（定番項目）と、数年に一度の調査で回答傾向を把握する項目や臨時的に調査する項目（可変項目）を含めて構成されていますが、可変項目に関し、今後どのような調査項目を設けるべきか、近年の高等教育現場を取り巻く状況も踏まえ、議論を行いました。議論の結果を踏まえ、2023年度に実施した学びの実態調査の可変項目を一部変更しました。

学修成果を可視化する機能の導入について、議論を行いました。現在の大学教育に求められている、学習成果の可視化や学修者本位の教育を実現するための1つのツールとして、本学でも学修ポートフォリオのような学修成果を可視化する機能を整備するべきか、想定される活用方法も踏まえ、議論しました。

生成ＡＩについて、実際に生成ＡＩを活用した事例や、活用した際に気づいた点や課題点を、互いに共有した上で、今後の高等教育において生成ＡＩを活用することについて議論しました。

その他に、「教育方法・教材開発費」について、今年度申請のあったＢ区分1件の審議を行いました。

学習支援検討部会

●設置の趣旨

本学における学習支援活動および学習支援環境（ラーニング・コモンズ等）の運営方法を検討することを目的として設置されています。

●活動報告

本部会では、LCの入室者、各エリアの利用者数、学習相談件数、学習支援コンテンツへのアクセス状況、アカデミックスキルセミナーの開催状況等について報告し、それをもとにラーニング・コモンズ（LC）の運営について意見交換を行いました。

今年度はコロナ禍による各種制限を撤廃し通常どおりの運用とし、学習相談や、アカデミックスキルセミナー、各種イベント等については、対面とオンラインを併用しながら行いました。対面での学習相談は、両校地とも、春学期時点ですでに、コロナ禍前である2019年度の年間相談件数を上回る状況にあり、学生のニーズが高いことがうかがえます。

その他、今出川図書館の閉館に伴う、自習スペース確保への対応として、良心館ラーニング・コモンズの座席増設や、発話禁止の座席を新たに設けました。さらに、10月より新たな学習スペースとして、新町キャンパスの新創館1階に学習スペース「アカデミックプラザ」を開室しました。

2013年に良心館ラーニング・コモンズが開室し、10年を迎えました。これまでの利用実態を踏まえ、見直しを行いながら、引き続きより良い学習環境を提供できるよう検討いたします。

■大学入学準備講座

高校生を対象に、大学における必要な学力レベルを知ってもらうこと、正しい学部選択の機会を与えることを目的とし、「大学入学準備講座」を開講しています。本学教員がそれぞれの専門分野で扱う学問の内容から高校生が興味を持ちそうなテーマを選んで、大学で実際に行われる授業と同じ形式で高校生に講義を行っています。

2023年は対面とオンデマンドで開催し、49校から多くの高校生にご参加いただきました。

対面講義での様子

オンデマンド講義の様子

講座一覧

A1～A7：対面講義
B1～B7：オンデマンド講義

- 講座A1（政策学部）暮らしやローカルSDGsから始める持続可能な社会づくり
- 講座A2（経済学部）もし、政府が何もしなかったら？ ―経済政策とは―
- 講座A3（神学部）キリシタンの聖地巡礼と遺跡歩き ―その歴史・文化・観光について考えよう―
- 講座A4（文学部）環境文学のすすめ ―イギリス・ロマン主義から考えるSDGs
- 講座A5（グローバル・コミュニケーション学部）Decoding the world around us
- 講座A6（心理学部）実験から明らかにする心と感性の働き
- 講座A7（理工学部）高校の物理を大学の勉強に発展 ―物体の重心の公式理論を探求―
- 講座B1（社会学部）メディアを介した「見る」経験とは？
- 講座B2（法学部）憲法の役割・機能 ―統治機構・憲法上の権利をめぐる現代的諸問題―
- 講座B3（商学部）スーパーマーケットの歴史で振り返る日本の小売業
- 講座B4（グローバル地域文化学部）ヨーロッパの見えない「壁」 ―ジェンダー・セクシュアリティ・エスニシティから考える
- 講座B5（文化情報学部）数学で明らかにする人間の行動と社会
- 講座B6（生命医科学部）生命のスマート戦略：ゆらぎが生み出す自律的な安定性
- 講座B7（スポーツ健康科学部）「障害者スポーツ」って何だろう？

受講者の声（対面参加者分より）

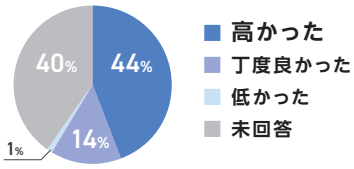
- 大学の勉強のため、今からしっかり勉強しておく必要があるなと思いました。
- 大学の講義を始めて聞いたのですが、全体的にとてもレベルが高く、新しいことを学べて楽しかったです。
- 名前だけではどんな学部か分からなかったので、具体的な講義内容を聞けてとても参考になりました。
- 楽しく授業を受講でき、今までより大学に対する興味が深まりました。
- 今後の進路を考える際の参考になりました。
- 直接先生に質問をすることができ、とても貴重な経験になりました。

各講義の概要等、詳細を掲載しています。

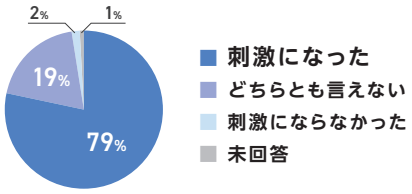
大学入学準備講座 https://clf.doshisha.ac.jp/clf/preparation_course/course.html

アンケート結果

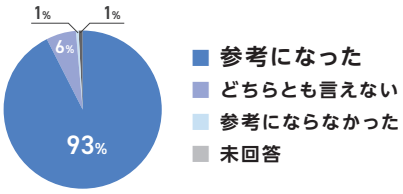
Q.講義のレベルはいかがでしたか？



Q.講義の内容はこれからの高校における勉強の刺激になりましたか？



Q.将来志望する学部を選択する際の参考になりましたか？



■2023年度学生調査報告

2023年度に実施した学生調査

2023年度の各種調査の実施概要

入学時調査

調査対象　2023年度春学期入学の学部1年次

実施方法　WEB調査(Microsoft Forms)

回答期間　2023年4月12日(水)～26日(水)

有効回答　3,584件・55.3%

調査結果の掲載サイト▶

学びの実態調査

調査対象　2023年度学部1～3年次

実施方法　WEB調査(Microsoft Forms)

回答期間　2023年11月1日(水)～22日(水)

有効回答　1年次　1,467件・22.6%
2年次　1,011件・15.9%
3年次　810件・13.1%

調査結果の掲載サイト▶

「学びのふり返り」卒業時調査

調査対象　本調査を実施する学部の2023年度学部卒業者

実施方法　WEB調査(Microsoft Forms)
一部の学部は質問紙調査を併用。

回答期間　卒業論文提出時期～卒業式当日

*本調査は学部が実施主体のため、実施の有無、実施方法、回答期間などの詳細は学部ごとに異なる。

新入生の志望動機にみる、本学の学びのイメージ

●「入学時調査」の実施の背景と調査内容

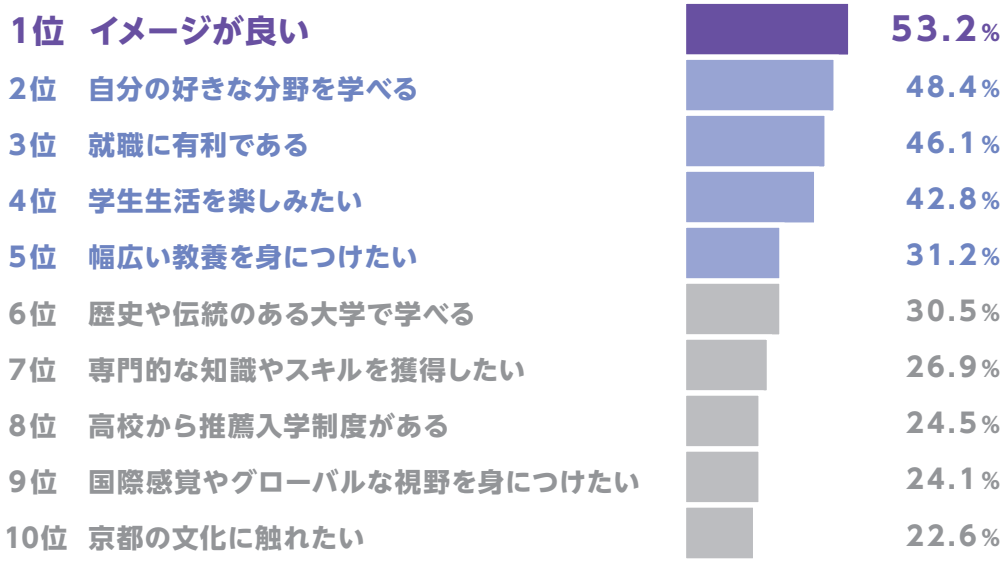
本学は2025年に創立150周年を迎えます。それに向けて優先的に取り組む課題をまとめたVISION2025のなかの「Ⅰ.学びのかたちの新展開」で、「学習成果の把握と内部質保証システムの確立」を掲げ、学習成果の把握と教育課程の効果検証を継続的に実施し、見つかった課題を改善へとつなげられるような体制を構築することを目指しています。その一環として、ディプロマ・ポリシーとカリキュラム・ポリシーが有機的に運用され、機能していることを検証するために毎年度実施している学生調査の内容を、2020年度に大幅に見直しました。従来の在学生対象の学生調査について1調査あたりの調査項目を削減するとともに、卒業年次の学部学生を対象とした「『学びのふり返り』卒業時調査」を2020年度に開始し、2022年度には入学直後の学部1年次を対象とした「入学時調査」を新規事業として開始しました。その結果、大学入学時の状況に関する情報を入学直後に収集できるようになっただけでなく、学習状況に関して学生による自己評価の情報を入学時、1年次、2年次、3年次、卒業時の5時点で収集できる環境が整いました。入学時から卒業時までの本学在学期間中の学生の成長や変化を調査することで、より詳細に、本学における学習成果や教育効果を可視化できるようになりました。これらの調査結果や学内の既存の教学情報を組み合わせながら、本学の教育の特徴を客観的に把握し、教育活動の自己点検・評価を組織的に実施できるような基盤整備を、順次進めています。

本学の入学時調査は、「回答者の基本情報」「本学を志望した動機・理由」「3つのポリシー(AP・CP・DP)の理解度・認知度」「大学入学以前のICT機器の操作経験、学習に関する経験や習慣」「学生の自己評価にもとづく入学時の知識・スキルの獲得状況」といった、学生の特徴や大学入学前までの学習経験を把握できるような調査項目から構成されています。このうち、「本学を志望した動機・理由」と「学生の自己評価にもとづく入学時の知識・スキルの獲得状況」については、従来、在学生対象の学生調査の調査項目を入学時調査に移管したものです。そのため、過去の在学生対象の学生調査も合わせると約15年分の蓄積があり、経年比較が可能です。

●新入生は本学のどこに魅力を感じたのか?

ここでは、入学時調査の「本学を志望した動機・理由」の調査結果にもとづき、新入生が本学で学びたいと思った理由について探ってみましょう。2023年度の調査結果をみると(図1)、最多は「イメージが良い」(53%)で、以降「自分の好きな分野を学べる」(48%)、「就職に有利である」(46%)、「学生生活を楽しみたい」(43%)と続いています。新入生は、卒業後の進路も重視しつつ、自分が学びたいことを学びながらキャンパスライフを楽しむことができそうな大学、という理由で本学を選んだことがよみとれます。

また、教養と専門性の両方を深めることのできる学びの機会と環境に魅力を感じている学生も少なくないようです。2位の「自分の好きな分野を学べる」に加え、「幅広い教養を身につけたい」(5位)、「専門的な知識やスキルを獲得したい」(7位)といった回答が上位10位以内に入っていることは、本学が人文社会系、理工系、ライフサイエンス、文理融合、スポーツ、国際系など幅広い学問分野を擁する総合私立大学であることが関係していると考えられます。創立から約150年続く歴史のある伝統校(6位)といった本学のもつ特徴を志望理由に挙げた学生も3割を占めました。



※複数回答

図1　2023年度生の志望理由・動機の調査結果(上位10項目)

志望理由の調査結果の経年で比較すると、「イメージが良い」は2008年度以降、連続1位で、5割前後のまま横ばいで推移しています。2位は2019年度まで「就職に有利である」でしたが、2020年度以降は、それまで3位だった「自分の好きな分野を選べる」と入れ替わりました。「就職に有利である」は2018年度と2019年度に5割台に達しましたが、それ以外は4割前後で推移しています。これに対して「自分の好きな分野を選べる」を理由に本学を選んだ学生の割合は、増加傾向にあります(図2)。2008年度は3割を割り込んでいましたが、その後緩やかに上昇し、2018年度には4割を上回り、2023年度は5割に迫っています。伸び幅は約20ポイントと、他の項目と比べて大きくなっています。

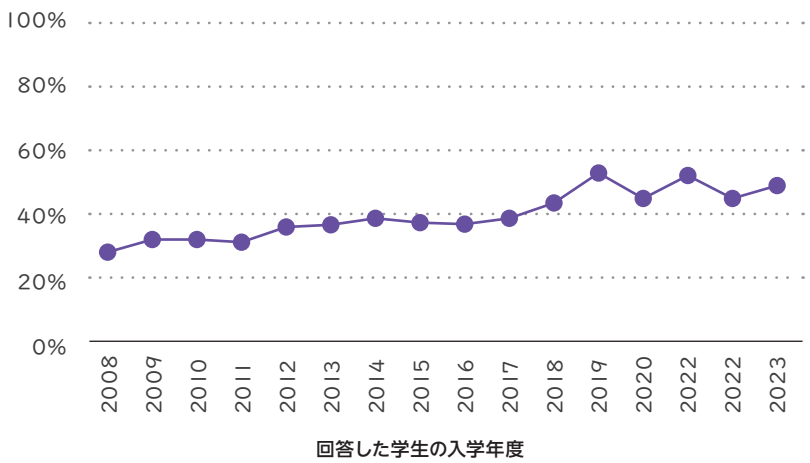


図2　「自分の好きな分野を学べる」を理由に本学を志望した学生の割合の推移

本学では、2003年度まで神・文・法・経済・商・工学部の6学部体制でしたが、その後、学部の新設や改組再編が続き、2013年度以降は14学部1インスティテュート体制になりました。その結果、本学に所属する教員の研究分野の多様性がより一層広がったことで、学生一人ひとりの興味や関心にもとづいてさまざまな学問分野を専門的に学ぶことができるような教育環境が整いました。このような「学べる学問の多様性」という特徴が本学の魅力として強まっていることが、この調査結果からうかがえます。

■ラーニング・コモンズ活動状況

2023年度はコロナ禍による各種制限を撤廃し通常運用に戻しました。学習相談や、セミナー・各種イベント等については、オンライン開催も継続し、対面・オンライン両方の良さを取り入れながら、安定的な運営を行っています。また、10月より新町キャンパスの新創館1階に学習スペース「アカデミックプラザ」を開室し、多くの学生が利用しています。その他、今出川図書館の閉館に伴う、自習スペース確保への対応として、良心館ラーニング・コモンズの座席増設や、発話禁止の座席を設けるなど工夫しています。

引き続き学生に必要な学習の場を提供し続けられるように努めています。

開催報告

良心館ラーニング・コモンズ　LC利用案内ツアー

LCを実際に案内し、利用方法やルールなどLCに関する疑問に答える利用案内ツアーを実施しました。

日時　2023年4月18日～5月19日 ※4月29日～5月5日を除く
曜日　火曜日・木曜日・金曜日
時間　11:30～12:00／15:45～16:15 ※各回同じ内容

ラーニング・コモンズ出張相談

ラーニング・コモンズのアカデミックサポートエリアのスタッフや、ラーニング・アシスタントによる、ラーニング・コモンズ外での学びに関する相談ブースを、期間限定で開設しました。

良心館LC

期間　〈春学期〉2023年4月11日～4月14日 13:30～16:00
場所　良心館1階教務センター前

ラーネッド記念図書館LC

期間　〈春学期〉2023年4月11日～4月14日 10:30～13:00
場所　知真館1号館入口付近

知真館1号館入口付近

良心館 教務センター前

アカデミックスキルセミナー

春学期はプレゼン発表の方法や、レポートの書き方などをテーマにセミナーを実施（全41回）し、秋学期はより具体的なレポートの書き方に加え、卒業論文や卒業研究に関連したセミナーを実施（全14回）しました。また、留学生向けに、日本語でのレポートや論文の書き方をテーマにしたセミナーも行いました。過去に行ったセミナーの一部は、ラーニング・コモンズ公式YouTubeチャンネルでオンデマンド配信も行っています。

期間　12:30～13:00（各回30分）
開催方法　〈春学期〉
対面または双方向リアルタイム配信（Microsoft Teams）
〈秋学期〉
対面または双方向リアルタイム配信（Microsoft Teams）

LC10周年記念イベント

良心館ラーニング・コモンズオープン10周年を記念し、ラーニング・アシスタントを経験し、各分野でご活躍されている研究者をお迎えしてトークセッションを行いました。良心館ラーニング・コモンズのこれまでの10年を振り返り、これからのラーニング・コモンズの在り方について語り合いました。

日時　2023年8月4日 17:30～19:00
開催　良心館ラーニング・コモンズ 2階 プレゼンテーションコート

TOPICS ラーニング・アシスタント（LA）の活動

LA研修

LA春期研修

今出川（対面）

日時　2023年3月22日 11:00〜16:30
場所　良心館317教室

京田辺（対面）

日時　2023年3月24日 13:00〜17:00
場所　情報メディア館102教室

オンライン

日時　2023年3月27日 10:30〜12:30
開催方法　Microsoft Teams

LA秋期研修

今出川（対面）

日時　2023年10月4日 10:45〜12:45
2023年10月10日 10:45〜12:45
場所　良心館ラーニング・コモンズ ワークショップルーム

京田辺（対面）

日時　2023年10月10日18:00〜20:00
場所　京田辺ラーニング・コモンズ ワークショップルーム

※グループに分かれて各1回の研修を受講

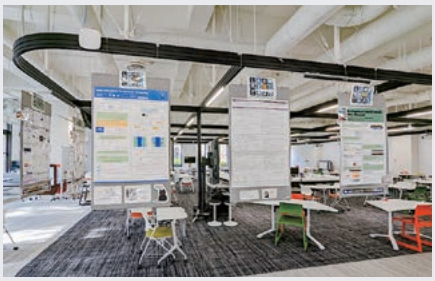
主なLA登壇イベント

レポート作成体験イベント「そうだ レポート、書こう。」
（対象：本学学生・大学院生）

大学生に何かと付きまとうレポートとうまく付き合うべく、意外と誰も教えてくれないレポートの書き方について、登壇者がレポートを作成する手順を一から見ていくことで、実際にレポートを書いた気分を味わいつつ、レポートの書き方を学びました。

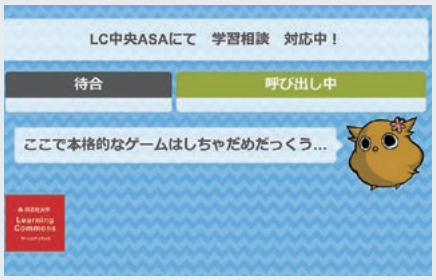
日時　〈第1回〉2023年11月21日 12:20〜13:00
〈第2回〉2023年12月5日 12:20〜13:00
場所　良心館ラーニング・コモンズ 2階 プレゼンテーションコート

その他



LA研究紹介ポスター

LAが研究内容を紹介するポスターを両校地LCにて掲示しました。ポスターは学会や研究会で実際に使用したものや、各自研究テーマについて解説したものなどさまざまです。プロフィール画像付きのLA自己紹介ポップも展示しています。



学習相談順番待ちシステム

京田辺勤務のLAが学習相談順番待ちシステムの運用を始めました。このシステムはアカデミックサポートエリアが学習相談者で混雑している際に利用します。専用のQRコードを読み取り、必要事項を入力すると京田辺LC入り口付近の壁面に呼び出し状況が表示され、順番になるとチャイムが鳴ります。

人感知システム

京田辺LC内にて人感知システムを導入しました。設置カメラがLC利用者数をカウントし、人数に応じてLCで流れる音楽のボリュームを調節する仕組みです。京田辺勤務のLAが開発しました。

学習相談利用状況

今出川校地良心館ラーニング・コモンズおよび京田辺校地ラーネッド記念図書館ラーニング・コモンズには、対面やオンラインでラーニング・アシスタント（大学院生スタッフ）や教職員に学習相談ができるアカデミックサポートエリア（今出川ASA, 京田辺ASA）があります。そのエリアの2024年1月末時点での利用状況をご報告します。

まず、2023年度（2024年1月末時点）の両校地ASAおよびオンラインでの学習相談件数は、今出川ASAが1,018件（前年度比(2022年1月末時点)200件増）、京田辺ASAが1,935件（前年度比331件増）、オンラインが33件（前年度比8件増）でした。

次に、学習相談のそれぞれの件数を学年別にまとめたものが図1です。両校地ASAともに利用最多は1年次生ですが、2番目に利用が多い学生は、今出川ASAでは4年次生、京田辺ASAでは2,3年次生が僅差と校地によって違いがあることがわかります。その要因としては、今出川校地は文系学部が多く、今出川ASAでは4年次生で取り組む卒業論文に関連した相談が多くなる傾向があり、一方で京田辺校地は理系学部が多く今出川校地と比較して大学院生が多いことから、学年が上がるにつれ同じ学部や研究室の先輩等に相談ができる環境になっていく傾向があると推察されます。

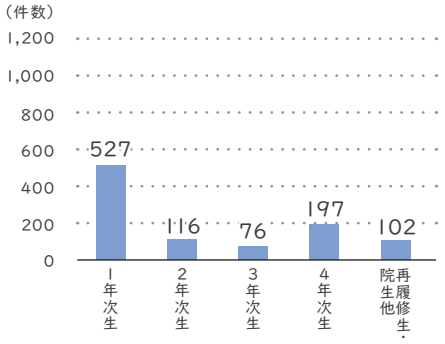


図1-①　今出川ASA

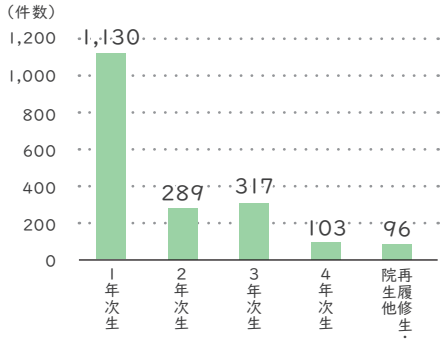


図1-②　京田辺ASA

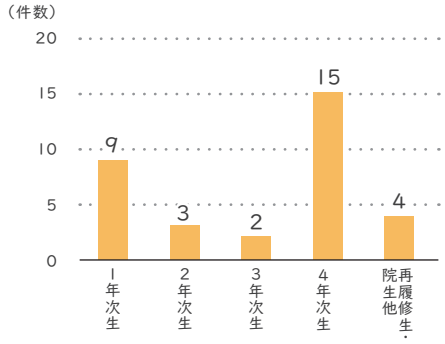


図1-③　オンライン

そして、学習相談のそれぞれの件数を相談内容別にまとめたものが図2です。今出川ASAおよびオンラインでは相談の内容は多岐にわたるものの、京田辺ASAでは特定の科目の学び方が突出して多いことがわかります。その要因としては、先に述べたように京田辺校地は理系学部が多いため数学や電気回路、化学など理系科目に関連した相談が集中していると推察されます。なお、相談内容は1人の相談に複数含まれることがあるため、相談者数より多くなります。

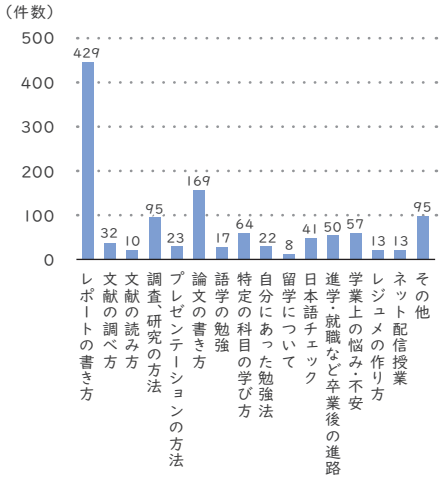


図2-①　今出川ASA

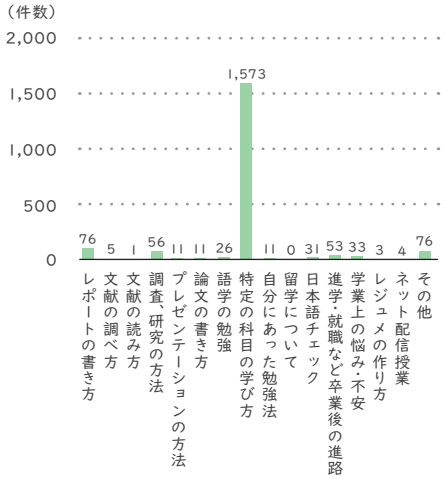


図2-②　京田辺ASA

図2-③　オンライン

最後に、２０１９年から２０２３年度（２０２４年１月末時点）までの学習相談件数の推移をまとめたものが図３です。２０２３年度は、新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザ等感染症と同等の位置づけとなり、感染症予防対策が大幅に緩和されことで大学構内は学生の活気をとり戻しました。その活気を裏付けるように学習相談の合計件数も、２０２４年１月末時点で新型コロナウイルス感染症発生以前の２０１９年度を上回るペースで増加しています。一方でオンラインでの学習相談は現在でも一定数の利用があります。その要因としては、コロナ禍を経てオンラインでのコミュニケーションが身近になった学生は、対面での学習相談を利用する気軽さで学生自身の状況に応じて相談窓口を使い分けている影響が考えられます。具体的には、自宅が遠方で学習相談のためだけに大学へ行くことが難しい学生が自宅からアクセスする、学部生だけでなく県外で論文執筆に取り組む大学院生が論文構成の相談を寄せる、など、われわれの予想を超えて学習相談の需要がある様子がうかがわれます。よって現在、アクセスの利便性や速やかな対応体制の構築などの向上を模索しながら引き続きオンラインでの学習相談にも対応しています。

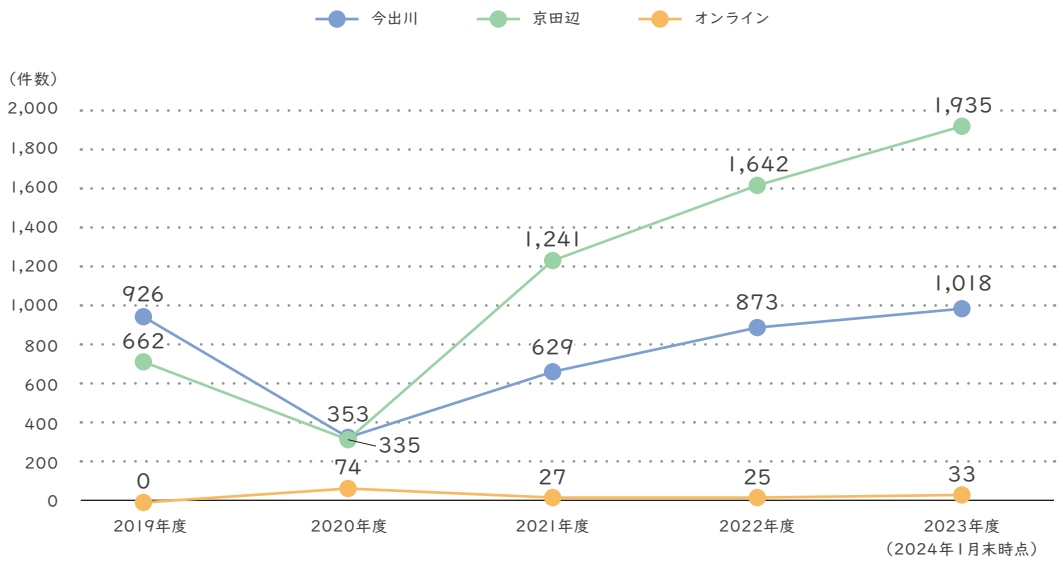


図３　学習相談件数推移2019～2023年度（2024年1月末時点）

施設利用状況

今出川校地良心館ラーニング・コモンズ（今出川LC）は、２０１３年４月に開設され２０２３年で１０周年を迎えました。

まず、この１０年間の利用者推移について、年度ごとに２０１３年度から２０２３年度（２０２４年１月末時点）までの利用者推移をまとめたものが図4です。開設初年度から多くの学生が利用している様子がうかがえます。その後も順調に利用者数は増加していましたが、２０２０年度前後から新型コロナウイルス感染症の影響によりLC閉室、３密回避のための開室時間短縮や座席数制限を余儀なくされ、利用者数が激減しました。

その後、２０２２年度まではお互いの顔が見える透明のパーテーションや双方向オンライン授業を受講できるエリアの設置、入室者数制限など、感染症対策を徹底しながら学生が安心してLCを利用できるよう配慮した運用となりました。

そして、２０２３年度は、新型コロナウイルス感染症が季節性インフルエンザ等感染症と同等の位置づけとなり、感染症予防対策が大幅に緩和されたことで大学構内は学生の活気をとり戻しました。LCも例外ではなく、パーテーション撤去や座席数、利用方法の制限解除をしたことで、まだ年度途中ながら２０２２年度の利用者数を上回っています。また、留学生の入国もできるようになり、LC内はさまざまな言語が飛び交う国際色豊かな空間となっています。

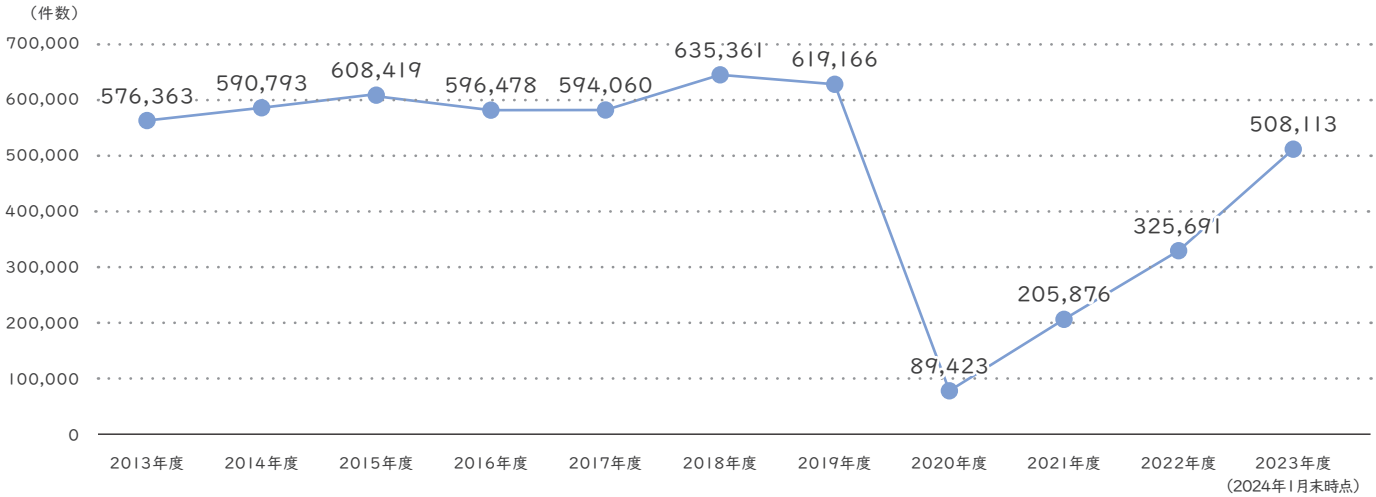


図４　今出川LC利用者数推移【年度別】2013～2023年度（2024年1月末時点）

次に、年度ごとの利用者数の内訳を学年別で表したものが図５です。いずれの年度も１年次生の利用が最多で、２年次生、３年次生はほぼ同等の割合で利用していることが確認できます。

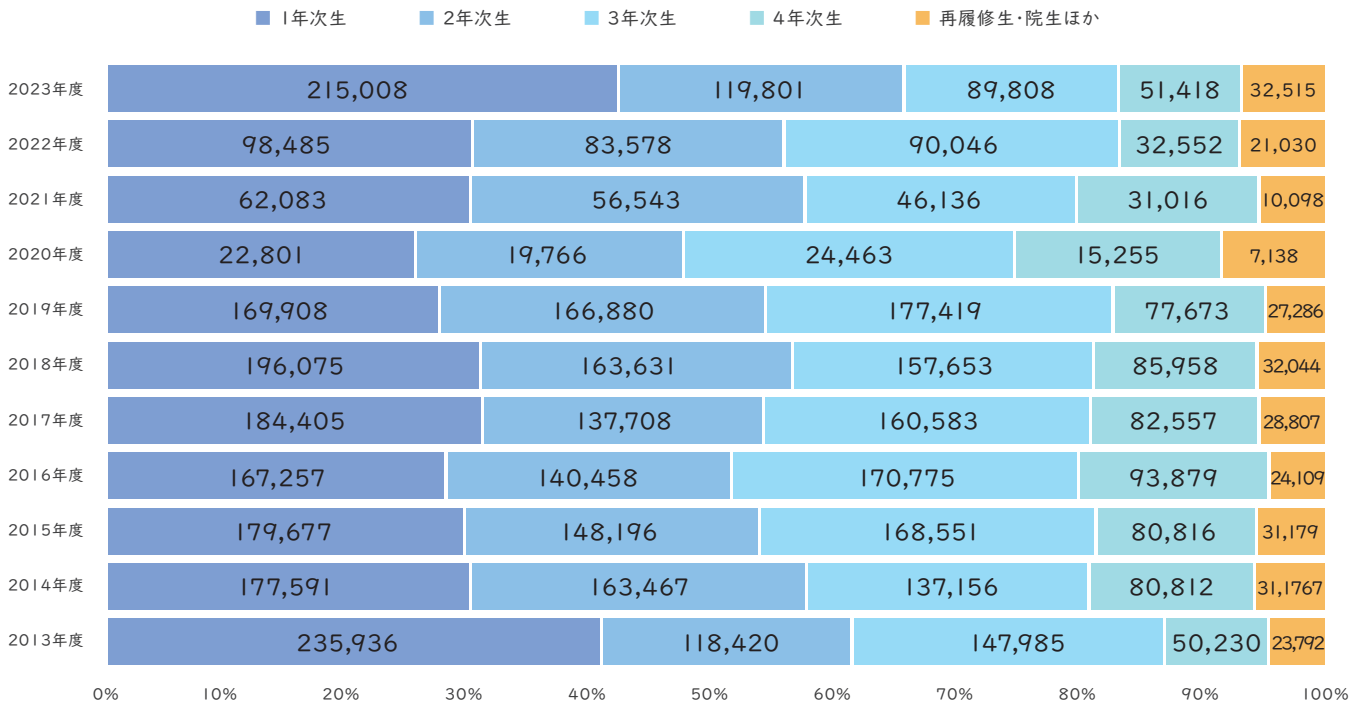


図５　今出川LC利用者数推移【学年別】2013～2023年度（2024年1月末時点）

そして、年度ごとの利用者数の内訳を月別で表したものが図６です。いずれの年度も学期末試験のある7月と1月に利用者が多くなる傾向があるものの春学期（4～9月）と秋学期（１０～3月）とでどちらの学期に偏ることなく年間を通して安定して利用されていることがわかります。

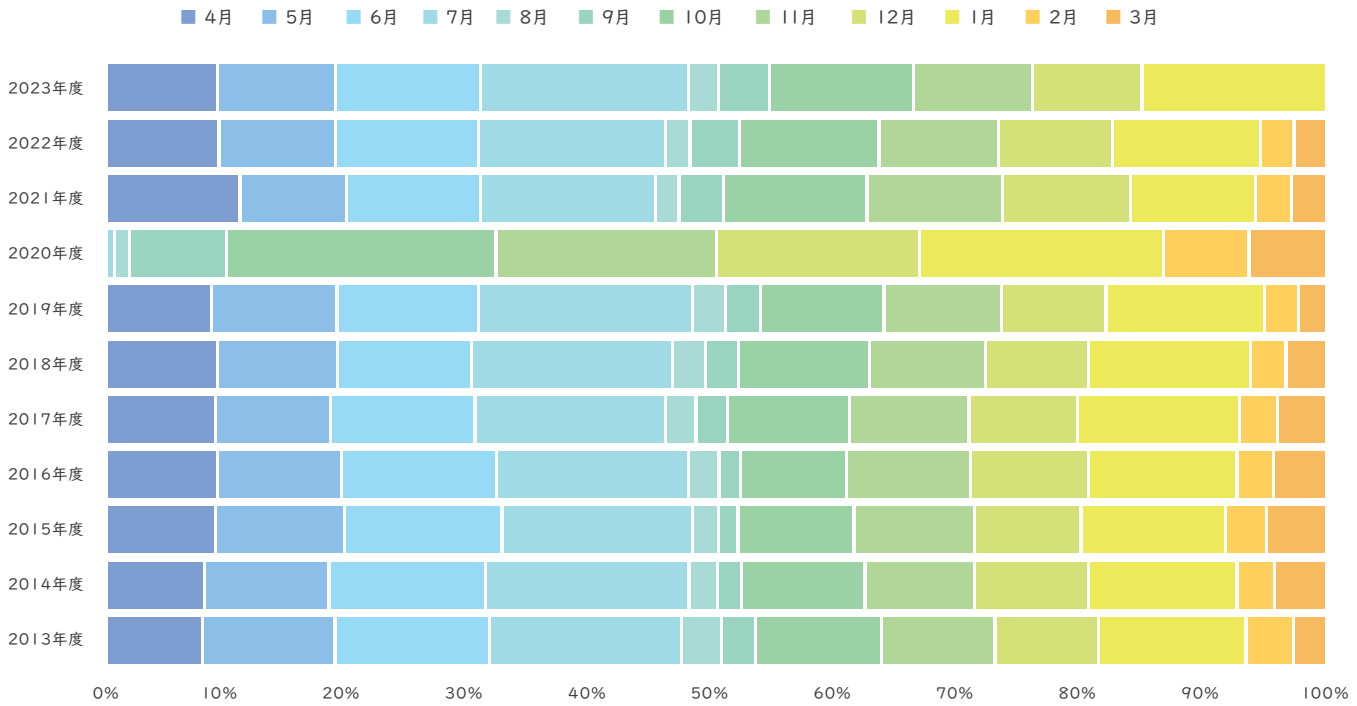


図６　今出川LC利用者数推移【月別】2013～2023年度（2024年1月末時点）

以上のように２０２３年度で１０周年を迎えた今出川LCは、開室当初からグループ学習、個人学習にかかわらず学習の場として盛んに学生に利用されています。一方で１０年前は最先端であったであろう機器やレイアウトを見直す時期を迎えていることも事実です。それは単に何もかもを一新するのではなく、１０年間のLC運営の知見を活かし学生のニーズや時代の流れを注視しつつ脈々と引き継いでいくものと新たに導入するものを見極めながら、まずはこれからの新たな１０年を見据えてこれまで同様堅実ながらも柔軟なLC運営をしていくことが必要であると感じています。

元ラーニング・アシスタントから見た

同志社大学良心館ラーニング・コモンズの過去、現在、そして未来

2013年にオープンした同志社大学良心館ラーニング・コモンズは、2023年に10周年を迎えました。10周年を記念し、良心館ラーニング・コモンズでトークイベントを開催し、ラーニング・アシスタント（ラーニング・コモンズアカデミックサポートエリアで学習支援に携わる大学院生スタッフ）を経験し、各分野でご活躍されている研究者4名が、良心館ラーニング・コモンズのこれまでの10年を振り返り、ラーニング・コモンズの未来について語り合いました。当日は、ラーニング・コモンズの運営に携わってきた関係者や現役のラーニング・アシスタントがオーディエンスとして参加しました。

左から 城阪早紀 氏、廣瀬喜貴 氏、奥田菜津 氏、竹永啓悟 氏

登壇者

大阪公立大学大学院経営学研究科 准教授	廣瀬喜貴 氏（2013年度LA）
大東文化大学法学部法律学科 准教授	奥田菜津 氏（2014年度LA）
名古屋大学高等教育研究科センター 特任助教	竹永啓悟 氏（2015年度LA）
同志社大学人文科学研究所 嘱託研究員	城阪早紀 氏（2015年度LA）

※以下、敬称略

竹永：同志社大学良心館ラーニング・コモンズ（以下、LC）は2013年にオープンしてからコロナ禍を経て今に至ります。廣瀬さんは10年前、LCのアカデミックサポートエリア（以下、ASA）でラーニング・アシスタント（以下、LA）の一員としてご活躍されました。オープン当時のLCはいかがでしたか。

廣瀬：当時はベンチャー企業のように試行錯誤しながら教職員もLAも、みんなでLCを作り上げていこうという雰囲気でした。

奥田：ベンチャー企業という表現は言い得て妙だなと思いますが、何も積み重ねていないからこそ自由に積み重ねていける状態でした。私たちLAも「何でもやってみて」といわれるような雰囲気が最初から整っていたのが印象的でした。

城阪：私がLAに任用されたときには、学習相談で使用する補助教材や、LAが企画した広報物・学習支援イベントなど、先輩LAが作ってくださった土台がありました。なのでそれを引き継ぎつつ、さらに良くしていくための試行錯誤をしていた時期でした。

竹永：補助教材や広報物などの中身を詰めていくにあたって、色々な専門分野のLAと教職員と議論し合いましたね。

奥田：ASAは学習相談が多いときとそうでないときがあって、相談者が来るまでの待機時間に何かできないかなということで広報物を作りはじめました。それをきっかけに編集やデザイン、色々なスキルが身につきました。様々な分野のLAとの協同作業をしたことは印象に残っています。

竹永：異分野の大学院生が集まる場というのはLAの一つの特徴ですね。

城阪：LA同士で話をするとき、自身の研究テーマについて他分野のLAに短い時間でわかってもらえるようにはどう説明したらいいか考える機会になりました。そういうことを考える中で視野が広がり、自身の研究を俯瞰して見直すことができたのではないかと思っています。また、LAが作成した補助教材の中にあるアカデミックスキルに関する資料を見て、当時、隣接領域とつながる知の基盤があるということに気づきました。「自分は学部生の頃どうしていたのか」と経験を体系的に振り返って言語化する機会を持てたことで、現在、学生を指導するときもアカデミックスキルの重要性を伝えることができるようになりました。

廣瀬：LAという経験を通して一番役に立っていると思っているのは、個人に対してオーダーメイド教育をするスキルを培ったことです。学習相談では相談者のそれぞれの習熟度によって理解力が異なるので、初年次ゼミや大学院ゼミなど、少人数でインタラクションがあるような授業のときに役立っていると思っています。

奥田：私は色々なタイプの学生の相談対応をし、学生がどこで躓くのか知ることができたのが今につながっていると思っています。もしLAの経験がなければ、大学で学生を教えながら「なんでこんなことがわからないのか。ただ授業を聞いていなかったんだろう」と片付けてしまっていたことを、「もしかしたらこう伝えたらわかってくれるかも知れない」と考えるようになりました。

竹永：同志社大学の学習相談は分野の異なる複数のLAが協同で対応するんですよね。それがとても重要なことだなと思っています。大学教員をやっていると色々な分野の学生を相手にすることがあります。自分の専門領域に限らず、あえて分野の異なる学生、違うバックボーンをもった学生を相手にチームで教えるという経験から、学生への伝え方や指導方法を先回りして考えるという力を得たと思っています。

奥田：200人以上の大規模講義を担当していると、一人一人の顔がよく見えないので、教室にいる学生たちが各々違うことを考えていて、違う勉強の仕方をしているということを想像するのは意外と難しいと思うんです。でも、LAをしていた頃、教員には相談できないような悩みを聞いた経験があるので、その経験を思い出しながら学生一人一人と向き合おうとしています。

廣瀬：今、奥田さんがおっしゃったことが非常に大事だと思っていて、2013年から、論文の探し方やテーマ設定の仕方など「教員にはこんな初歩的なことは質問できないけど、LAには質問できる」という感覚で学生が相談に来てくれていたんです。先生への質問の仕方がわからないから一緒に考えてほしいといった相談もありますし、学生がどこで躓くのか知ることができ、学生一人一人に対してどういう学び方が最適かを考えながらオーダーメイドで対応することを身に着けたような気がします。

今、目の前にいる多様な学生のためにできること

竹永：LCは多くの学生が利用する空間であり、学習相談に来る学生の悩みも多種多様ですから、ダイバーシティの観点でもLC、LAの役割は重要ですね。

城阪：同志社大学では2021年に「スチューデント・ダイバーシティ・アクセシビリティ支援室（SDA室）」ができました。学習支援・教育開発センターでも、去年、一昨年、カウンセリングセンターの方や手話通訳者の方をお招きしてLAを対象とした研修会を行ったと伺っています。私は同志社大学で担当している授業では、初回ガイダンスで「同志社大学ダイバーシティ推進宣言」を読み上げます。「同志社大学ダイバーシティ推進宣言」に「国籍、性別、障がい、性的指向・性自認、文化、宗教、思想信条等、様々な背景をもつ本学構成員が、共に学び、共に働くことができるキャンパスを形成します」とあるように、学生一人一人が同志社大学の構成員として学ぶ権利をもっていて、皆さんの学びのためのサポート体制が整っていることを伝えます。

奥田：大学に学びのためのサポート体制が整っているとして、学生がそのサポートを知り、利用するという段階まで行くことが大事ですよね。学生が学びのためのサポートを利用するためには各教員が学生に適切な窓口を案内できるようにする有機的な連携も必要だと思います。同志社大学は学部が学習支援・教育開発センターと連携して学生のLC利用促進に繋げるなど、大学として制度が整っていると感じます。

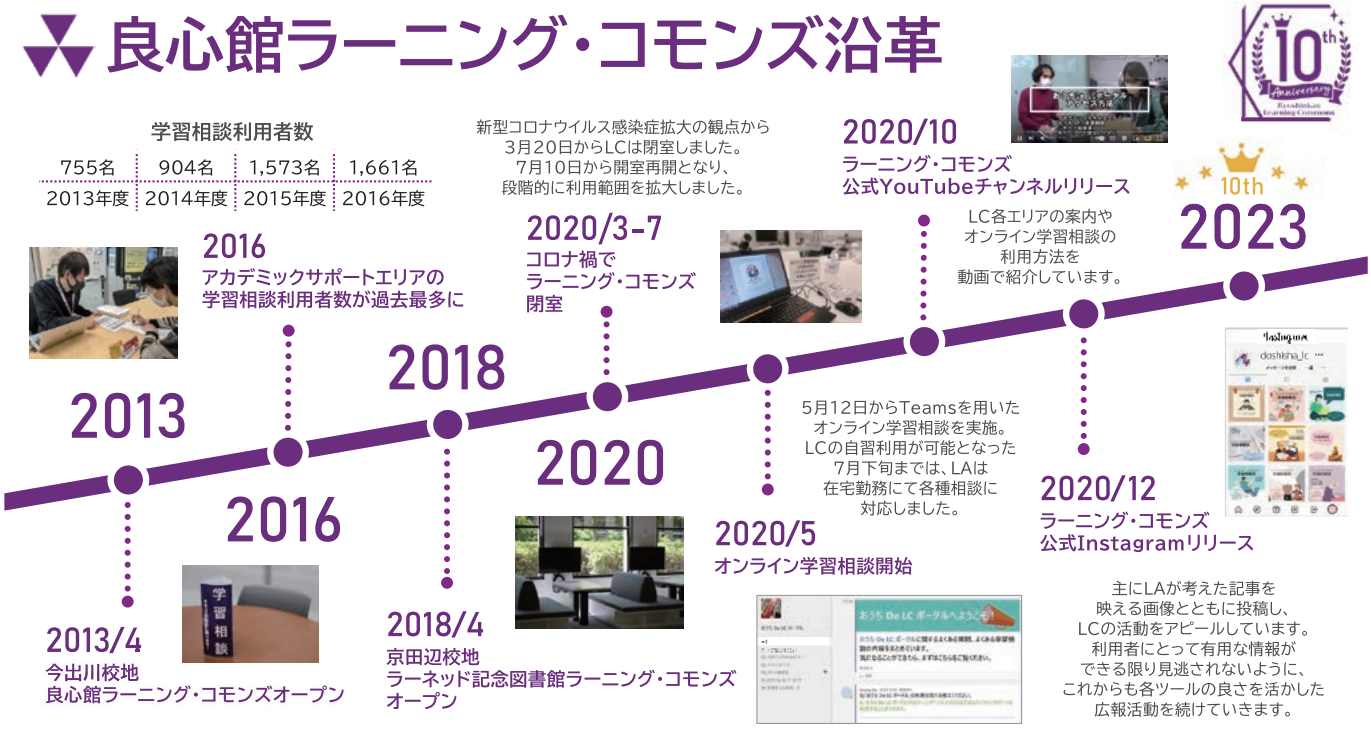
廣瀬：他大学にもLCはありますが、図書館の中の一部であることが多い一方、同志社大学のLCは設備や人的支援がしっかりしていますね。

城阪：しっかり研修を受けたスタッフ（LA）が常駐していて、いつでもチームで相談に乗ってくれる。私はこのようなサポート体制が利用学生にとって必ず良い効果を与えてくれることを知っているので、自信をもって学生に勧めています。

廣瀬：同志社大学のLCでは2020年度からオンライン学習相談も開始したようですが、コロナが収束し、対面授業や対面の学習相談が再開した後もオンラインでのサポートを継続しているのはすごいと思います。対面とオンライン両方の窓口が共存できている。そのスタンスは、ぜひ継続していただきたいです。

竹永：その他、YouTubeチャンネルの開設、LA発案のInstagramの開設など、SNSにも力を入れているんですよね。先ほど奥田さんが、オープン当初からLAも「何でもやってみて」といわれるような雰囲気があったとおっしゃいましたが、多くの場合、何か新しいことをするためには長いプロセスを踏まなければならないため、アイディアをすぐ実現するのは難しいで

良心館ラーニング・コモンズ沿革



す。これからもLAが主体となり自由な発想でどんどんトライしてほしいですね。私はLAだった頃、研修会の提案をしたり、LAと共著で論文を執筆したりしました。LA間で情報共有をして研修会に赴くなど、同志社大学の外との繋がりをもつのも良いと思います。

ラーニング・コモンズの未来―学際的な空間へ

竹永：最後に未来のLC、そして未来のLCを支える一員であるLAに何かコメントはありますか。

廣瀬：私がLAだった頃は、良心館LCがオープンしたばかりだったのでデータがありませんでした。でも、今は10年蓄積されたデータがあります。今まで培ってきたデータを使って、エビデンス・ベースドで今のLAや教職員が研究を行えば、LAにとっても業績にもなりますし、LCという施設と、LCを支える組織がさらに良い施設、良い組織に発展していけると思います。私は良心館LCの2014年度LAだった中園宏幸さんと一緒にLAの業務に関する論文を出したことがあります。その論文を書いたことがきっかけで前任校の高崎商科大学でFD研修を担当しました。今はその頃よりもデータが蓄積されているので、発展させてより良い研究ができるのではないでしょうか。

城阪：以前、竹永さんと2016年度LAの阿部康平さんと共著でLAの学習支援経験と教育指導能力の形成について研究しました。当時、さらに明らかにしたかったのは、学習相談を利用した学生が、助言を受けた後どのように自身の学びに活かせたかについてです。追跡調査は難しいところもありますが、そういった部分も今後フィードバックできると良いなと思いました。

奥田：10年経ったことで膨大なデータが蓄積され、良いこともありますが、10年も経ったから、これまでのやり方を踏襲すべきかどうか悩むことが出てくるかも知れません。ですが、過去の私たちだって未来の誰かのためにやっていたわけではなく、その時、その時、必死になって「今、目の前にいる学生のためにどのようなサポートができるか」を考えていました。ですので、今のLAの皆さんも「昔から続けてきたことだから、今やめたら申し訳ない」と思わず「今、目の前にいる学生のために」教職員と一緒に新しい未来を作っていってほしいです。

竹永：私の関心がある研究は学際性というテーマですが、学際性という観点から見るとLCは共創、学びの共有性ということで貴重な空間だと思っています。学際性とは「自分というものがあって、アイデンティティがあって他者を写し鏡にして自分にどのような影響を与えるか」が重要な概念です。自分の凝り固まった観念があれば、それを修正して常時、次に向けて新しいものを作り出していくということを考えると、LCにおける学習支援も学際的なことだと言えます。これからも、同志社大学のLCが学生を支援するだけでなく、LA自身も気づきを得て、他の視点を採り入れて次のステップに進むことができる、自分を変えることができる場であり続けることを期待しています。

COLUMN
大学教育の今

新学年暦事始め

2024年度から本学では新学年暦がスタートする。これまでは、半期で15週間にわたって授業期間がとられてきた。これが、新学年暦では授業期間を13週間として、従来に比べて不足することになる2週間分の時間は、コロナ禍でそのノウハウを獲得したオンデマンド授業や、あるいは、学外へ場を移しての体験型授業などで代替されることになる。見方を変えれば、授業担当者にこの2週間分をどう使うか知恵を絞ることが求められるようになった。

従来から学生に向けて各授業のシラバスが作成・公開されてきたが、新学年暦のもとではシラバスもその記載方法がかなり変わることになり、授業担当の先生方は作成にかなり苦労されたのではないかと推察する。教務部では、13週間の授業期間の前（DO Weekと呼ぶ期間）に1週分の授業と終了後に1週分の授業をオンデマンドで配信することを基本型として示している。その一方で、上記はあくまで基本であり、90分×2コマ分の180分をどう使うかに授業担当者の裁量も認められている。13週間の教室での授業の効果を180分のオンデマンドでいかに最大化できるのか、をシラバス作成に当たって腐心された方も多いのではないか。また、オンデマンドを使わない授業のシラバス作成では、受講生にとって効果的なことは何だろうと、さらに悩まれたのではないだろうか。シラバスの作成で感じることのできた新学年暦での変化を楽しみにしている教員が多くいることを期待している。

新学年暦は大きな挑戦であり、また挑戦に失敗はつきものである。大切なのは、エラーがあったと感じた場合に即座にその原因を突きとめ修正を図ることであろう。新学年暦では、従来以上に、個人ベースでのPDCAサイクルの確立が求められているのであろう。

学習支援・教育開発センター所長　岡田 幸宏

CLF 同志社大学 学習支援・教育開発センター レポート REPORT
Center for Learning support and Faculty development report

「シーエルエフ レポート Vol.35 」
同志社大学 学習支援・教育開発センター レポート

発行日：2024年3月31日
発行者：同志社大学 学習支援・教育開発センター
京都市上京区今出川通烏丸東入　明徳館１Ｆ
[Tel] 075-251-3277 [Fax] 075-251-3025
[E-mail] ji-kyoik@mail.doshisha.ac.jp
https://clf.doshisha.ac.jp/